

《牧師室から》 ありがとうございます

◆毎週書いてきたこの欄も今日が最終回です。いつもだと思いつくままに書くのですが、最後となると何を書いたら良いだろうかと迷います。ただ、皆さんにお伝えしたいのは、この12年、本当に楽しく牧会させていただいたということです。共に主を信じ、共に礼拝をささげて歩んできた日々のかげがえのなさを、今しみじみと感じています。これまで何度かお話ししてきたように、赴任するまで九州には一歩も足を踏み入れたことがなかったのです。最初は不安もありました。それなのに、わたしにとって福岡はこれまででもっとも長く暮らした場所になりました。これからしばらくは福岡ロス、警固ロスになると思います。主イエスが、本当に思ってもかけない出会いを与えてくださったのだと感謝の他ありません。それでも牧師に転任はつきものとずっと考えてきました。いつかここでの働きも終わりの時がくる、皆さんと出会わせてくださった主イエスが、新たな場所へ出発するように促す時がくる、と考えながら過ごしてきました。共に過ごす時間は限られています。でもだからこそ、与えられた「今」という時を、かけがえのない大切なものとして生きたい、とも思うのです。これまで本当にありがとうございました。みなさんが、新たな牧者を迎えて、また新たな交わりを形作り、教会の歩みを先へと進められることを希望していますし、必ずやそうなると信じています。皆さんの歩みを覚えて祈っています。どうかわたしどものためにもお祈りください。◆早くも礼拝堂のツタの葉が芽吹きはじめました。主の復活ハレルヤ！◆皆様の上に、主イエス・キリストの祝福がいつまでも豊かにありますように。



《2024年3月24日の説教要旨》

「いと高きところには栄光」 ルカによる福音書19章28-44節

イエスと共にエルサレムへ続く坂道に行く弟子たちは、「自分たちの見たあらゆる力のことで喜び、声高らかに神を賛美した」(19:37 私訳)。「力」とは壮麗なエルサレム神殿を建設した力のこと。弟子たちは世の建造物に心を奪われ、ゼカリヤ書の預言通りろばの子に乗って入城するイエスが、メシアとして、まもなく神殿の主として世を支配するとはしゃいだ。

しかし、イエス自身は、軍馬に乗るのではなく、みすばらしく小さなろばに乗ることで、まことのメシアは力づくの支配をするのではなく、小ささと弱さを身にまとい、愛によって平和をもたらすことを示そうとしたのだ。

弟子たちは誤解しながら詩編118編を歌い、イエスがメシアとして君臨することを歌う。それをファリサイ派の人々が咎めた時、イエスは「言っておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫び出す」と応えた。誤解であっても、イエスがメシアであるというのは間違っていない。そして、そのメシアの有り様は、そのままこの世の支配者への批判となる。

「石が叫ぶ」は、ハバクク書2:11「石は石垣から叫び、梁は建物からこれに答える」による。立派な家が建っている。その家は不正によって建てられた。それを建材である石が告発する。梁もこれに呼応する。不正にさらされ虐げられている人々の「犠牲」によって社会が築かれ、都の「繁栄」があることを思う。小さくされた人々の声にならない声に呼応して声をあげる者が必要なのだ。そして、その町の人々が神のみ心にかなう道を歩むよう祈り続ける者が必要なのだ。巨大な建造物のあるエルサレムで、福岡で、東京で、主に従って小さくされた人々の側に立ち、声をあげ、神を賛え歩む群れがある。わたしたちは町の希望として立てられているのだ。